皇典講究

試驗問題集

安倍喜平編輯

上

特36
320

013990-000-5

特36-320

皇典講究試驗問題集　上

安倍　喜平／編

M17

ABB-0242

大講義安倍喜平編輯

皇典講究試驗問題集

文敬堂發兌

特36
320

皇典講究試驗問題集例言

一此書ハ我皇典研究會所ニ集曾シテ學課諸書ヲ涉獵スル徒ガ進歩ノ如何ヲ反復試驗シ傍ラ徵考ノ限界ヲ擴メ記憶力ヲシテ厚强ナラシメンガ爲ニ編纂スル所ナリ

一皇典研究ニ關スル書類ノ數多ナル中ニ就テ祝詞宣命紀記二典ノ如キハ古來傳說其軌ヲ殊ニシ先哲ノ註解亦其岐ヲ多クス故ニ諸書ニ就テ精說ヲ求メントスル者頗ル其取捨ニ困シム然リト雖モ其說々ヲ舉ケ反復討究ノ后其歸スル所ヲ求得ルニ非ズンバ研究ノ名義其詮ナシコレ其煩雜ヲ厭ハス反復ヲ辭ス贅語ヲ費ヤシ數個ノ問題ヲ設クル所以ナリ

一此書延喜祝詞式續紀宣命古語拾遺日本書紀古事記等ノ諸書中註解煩雜諸說多岐ナル條々ヲ拔鈔シ問題數條ヲ設ク

特36
320

皇典講究試驗問題集例言

一此書ハ我皇典研究會所ニ集會シテ學課諸書ヲ涉獵スル徒ガ進歩ノ如何ヲ反復試驗シ傍ラ徵考ノ眼界ヲ擴メ記臆力ヲシテ厚强ナラシメンガ爲ニ編纂スル所ナリ

一皇典研究ニ關スル書類ノ數多ナル中ニ就テ祝詞宣命紀記二典ノ如キハ古來傳說其軌ヲ殊ニシテ先哲ノ註解亦其岐ヲ多クス故ニ諸書ニ就テ精說ヲ求メントスル者頗ル其取捨ニ困シム然リト雖ヒ其說々ヲ舉ケ反復討究ノ后其歸スル所ヲ求得ルニ非ズンバ研究ノ名義其詮ナシコレ其煩雜ヲ厭ハス反復ヲ嫌ス贅語ヲ費ヤシ數個ノ問題ヲ設クル所以ナリ

一此書延喜祝詞式續紀宣命古語拾遺日本書紀古事記等ノ諸書中註解煩雜諸說多岐ナル條々ヲ拔鈔シ問題數條ヲ設ク

漸次梓ニ上レンヲ同學ニ頒タントス今祝詞式ノ部上卷先成ルヲ以テ鉛字ニ附ス下卷ハ日ナラズ頒與スルヲ待ツベシ

一設問ハ書中ノ拔鈔ニ係ルヲ以テ全文ヲ見ルニ由ナシ其全文ヲ見ントスル者ハ祝詞正訓祝詞考古訓古事記神代紀葦芽歷朝詔詞解等ノ諸書アリ篇ヲ逐題ニ照ラシテ其全ヲ見ルベシ

一研究ニ從事スルノ徒時々此書ニ就テ問題ヲ得實際公試ヲ受ルノ思ヒナナレ答辨口述ヲ試ミ反復措サルニ於テハ學課進歩上ニ就テ大ニ其効ヲ裨補スル所アランカ

明治十七年四月　　編輯者記

皇典講究試驗問題集

兵庫縣淡路國皇典研究會所　編纂

祝詞式之部

（第壹）祝詞の二字を考にハ乃里刀其登と訓む何れか是なるや

（第二）祝詞を考にハ詔賜言の約言ありと云ひ後釋にハ只乃里登と訓む何れか是なるや

（第三）宣說言の約言なりと云ふ何れに從ふべきや

（第四）詔と云ひ宣と云ふも皆上より下へ云ひ聞かす詞なりと思ふに今神に申す祝詞を乃里登と云ふハ如何

（第五）諸祭の祝詞を專ら中臣氏の宣り申すハ何故なるや

（第五）式の祝詞の中大殿祭御門祭等に限りて齋部氏乃

宣申すハ何故なるや

（第六）祈年祭を登志其比乃万都里と訓む譯を問ふ

（第七）祈年祭の始まりしハ何れの御世なるや

（第八）集侍を考にハ未爲宇古那波里波牟倍留と訓み後釋にハ宇古那波禮留と訓めり何れか是なるや

又集侍を宇其那波禮留と訓む意義を問ふ

（第九）神主と祝部の差別を問ふ

又祝部を波布利と訓むハ如何ある譯ぞ

（第十）諸の字を考にハ諸聞食を下へ附けて讀まれたれど後釋の説ハ祝部等諸を上へ附けて讀むへしとあり何れの説に從ふべきや

（第十一）宣の字を考にハ乃里多麻布と訓まれたれど後釋及正訓等にハ乃留と訓まれたり何れか是なりや

（第十二）高天原とハ何方をさして申すことなるか

（第十三）神留坐の三字を加牟都麻理麻須と訓む譯を問ふ

（第十四）神留坐を下つ國へ降り給むとして天上に留り給ふを申すなを云ひ又つまると云ふハ全世界に神靈の充塞りたまふことを申すとも云ふ此説何れに從ふへきや

（第十五）祝詞の文中に皇何々とある皇乃字を考にハスベと訓み後釋の訓及ひ正訓にハたべてスメを訓めり何れに從ふべきや又皇の字を斯く訓む譯を問ふ

（第十六）皇睦神漏伎命云々とある所乃皇睦をスベムツと訓み又ハスメラガムツと訓む何れか正しきや

（第十七）右の睦の字を皇睦とつゝけてスメラガムツと訓

むべしと云ひ又睦神漏伎命とつゞけてムツカムロギノミコトと訓むべしとの說あり兩說何れか是なるや

（第十八）神漏伎神漏美を考にハ神須倍良袁岐美神須倍良米岐美なりと云ひ講義にハ上在君上在女なりと云へり兩說何れに從ふべきや

（第十九）神漏伎とハ何れの神を申すか神漏美とハ何神を申すか

（二十）皇睦神漏伎神漏美命とハ皇祖の神等に限りて申すか皇祖あらぬ神等をも尊ふとみて申すことゝなるか如何

（第二十一）新年祭の初めに見へたる神漏伎命神漏美命此二ツの命の字ハ神名を稱するの命なるかまた詔命の命なるか

（第二十二）天社國社の差別ハ如何

（第二十三）天社にハ何神等を祀るか國社にハ何神等を祭るか

（第二十四）天社國社ハ何天皇の御世に定め給ひしや

（第二十五）祝詞の文中に神何々と語の上に附けたる神字ハカミと訓むか又カムと訓むか又眞の神を稱ち奉るか尊みて申す語ふるか其明解及ひ說を問ふ

（第二十六）序ふ問ふ天神とハ如何なる神等を申すか地祇とハ如何なる神等を申すか

（第二十七）稱辭竟奉をメヽヘゴトオヘマツルト訓む譯を問ふ

（第二十八）皇神とハ天社國社ふ鎭座ル神等を取總て申すう

天皇ハ御祖を申すか如何

（第二十九）祈年祭を二月ゐ執行せらるゝ譯を問ふ

（第三十）御年初とハ何の事ぞ

又或本ゐ右ハ御年初を御年祈ハ誤あらんといへり此說あたれりや如何

（第三十一）皇御孫命ハ天照大御神の御孫日子穗能邇々藝命と申すゐ歷代乃天皇及當今の天皇をゐ斯く申し奉るか

（第三十二）宇豆乃幣帛又ハ宇豆の御前なを云ふ宇豆ハ如何なる言ゐ

（第三十三）幣帛をミナグラと云ふハ充座の意なりと云ひ又御手座なりと云ふ兩說何れゐあたれりや

（第三十四）朝日能豐逆登ハ祭典の時刻をさして云ふか又かならす此時を用ゐと云ふあらねど美稱して斯く申すか

（第三十五）御年皇神等と申せも一柱ゐハあらじ然るハ何々の神等を申ゐ其神名を問ふ

（第三十六）依左志率牟といふ事を俗語にてゝ如何申すへきや

（第三十七）奥津御年とハ五穀の中ゐて專ら稻を云ふとの說あり何故ゐ稻を奥津御年と云ふや

（第三十八）手肱冊水沫畜垂とハ農業の景狀を云ふ詞なれど耕作の內如何なる狀をさして云へることぞ

（第三十九）向股冊泥畜寄瓜といへるも右に同しき詞なるかと化また如何なる狀をさして云ふゐ

（第四十）取作年の取の字ハ手ゐて採る事ゐ又身を以て其

事を執るか又他の説あるか如何

（第四十一）八束穂の八ハ數を云ふか又彌の略言なるか

（第四十二）伊加志穂の伊加志ハ嚴重又ハ茂などの意なりと云ふ然らハいかなる穂の景狀をさすか

（第四十三）初穂とハ総て乃穀物にを云ふ事あるや又其秋の新稻に限りて云ふことなるや

（第四十四）千穎八百穎とハ數量を云ふか又數量に拘ならして其多きことを云ふか

（第四十五）穎とハ稻のいかなる物を云ふか又掛稅と云ふハいかなる物を云ふか

（第四十六）甕閇高知此閇乃字を上とも戸とも書けり何れか正字なるや又高知をハ如何なる形容ををすか

（第四十七）甕腹滿雙此腹の字ハ借字なるか又正字なるか又滿雙へとハ御酒をミカに滿てる事か又甕の數の多を云ふか

（第四十八）又問ふ高知と云ひ滿雙と云ふハすべて甕の形容をさ比語ありと思ふが高知ハミカのたけ高きを云ふか又神前に供へたる甕の高く著く見ゆるを云ふか滿雙と云ふ事の確説をも併せて問ふ

（第四十九）汁とハ何を云ふか穎とハ何をいふか

（第五十）甘菜とハ菜類乃中にて何等をいふか

（第五十一）辛菜とハ菜蔬類の中にて何等をいふか

（第五十二）鰭の廣物鰭乃狹物とハ大小の魚類をいふ事なるが何等の魚をさして廣物といひ何等の魚をさして狹物といふ區別なるか只ひろく大小の魚をさ比事なりと見てよろしきや

（第五十三）明妙照妙和妙荒妙此妙。の字ハ正字なるか又ハ借字なるか

又明。照。和。荒。の差別を問ふ

（第五十四）御年神の前に馬猪鶏を奉るハ何ゆへぞ

又白色を用ゆるハ由緣有ることか

（第五十五）巫の字を考にハミカムコと訓み正訓等にハミカムノコト訓む何れか正たるやや

（第五十六）巫と覡との差別を問ふ

（第五十七）祈年祭月次祭等の祝詞の中座摩御門生島等にハ御巫とあるを八神を齋ひ奉り御巫ハ限り大御巫と稱するハ如何なる譯ぞ

（第五十八）神魂より辭代主までを八神と稱し重く祭らせたまふハ如何なる譯ぞ

（第五十九）八神の中生魂足魂玉留魂の三柱ハ神代系圖より所見なしとハ何神をさし奉るか

（第六十）八神乃御功德を一々略述せんことを望む

（第六十一）手長御世の手。ハ發語ありと云ひ又足の略言ありて足長なりとも云ふ何れに從ふへきや

（第六十二）堅磐爾常盤爾とハ如何なることを比喩せし言ぞなるや

（第六十三）齋といふ言ハ忌をのべたる言なるよし諸書ありへり世俗此忌といふ言ハ凡て不祥ハ言なりと思ふか多きあ神をイハフあいひ又忌弖忌竹忌雜あとゝ神事ハ上に廣く用ひらるゝハ如何なる譯ぞ

（第六十四）茂御世とハ如何なるおとぞ

（第六十五）座摩を爲賀須理と訓みて井之後の意なりと云ひ

又井ナデと訓みて井之塘の意なりと云ふ何れゝ
あたれりや

（第六十六）生井栄井津長井と何れも井の神と聞ゆるが此神
ハ三柱にして斯く別々に御名を申し奉るあるゝ
又ハ一柱なれとも御名を種々に稱へて申すある
か

（第六十七）阿須波神と記傳に足場乃義なりとして足ふミ立
る地を守り坐す神ありと云ひ又大宮地乃靈ありゝ
とも云へり此説何れか當れりや

（第六十八）波比岐神を記傳に波比入君の意なりとして門ゝ
り屋内に入るまでの間の庭を守りたはゝ神ありゝ
と云へる其説あたれりや如何

（第六十九）右の神たちを祈年祭に重々しく祭たまふハ如何
ある譯なるや

（第七十）皇神乃敷座といふハ其地を領たまふを云が又
守護し玉ふを云が
又間祝詞乃文中に何々大歟といひ又何々太知を
いふとあり歟と知をハ同意義なるゝ又差別あ
るとや

（第七十一）宮柱太知ハ柱の太きをいふゝ宮殿を祝していふ
ゝ

（第七十二）千木と比木とハ同物あるか又異物あるゝ又如何
なる形の物なりや

（第七十三）高知ハ只千木乃高ゝを稱ゆるか又ハ宮殿の宏壯
あるを稱するなるか

（第七十四）瑞乃御舍乎仕奉云々此瑞の字をミツト訓むハ如

何なる義ぞ

（第七十五）又問ふ御舍ハ御殿なりとの説あり何故御殿をミアラカと云ふや

（第七十六）又問ふ仕奉ハ凡て下ある者の上の爲にする事と聞ゆるが上なる人乃御自ら萬事を物せさせ玉ふやうかへマツルと云ふ如何

（第七十七）天御蔭日御蔭登隱坐云々祝詞の文中天皇の御在所を稱する所にハ此語句を用ひられたり諸註に天を覆ひ日を覆ふ爲なりと云へるハ如何

（第七十八）又問ふ隱をカクレと訓み又カクリと訓む何れかあたれりや

（第七十九）又問カクリハ人に見えずと隱れますを云ふか只其中にをしまをいふか

（第八十）安國とハ只安ル國と心得てよれや又他に説あるや如何

（第八十一）知食と云ふ食の字をメスト訓む譯を問ふ

（第八十二）又問ふ天皇の世を御し玉ふを安見しゝと云ひ知食と云ひ見し賜ふと云ひ又物を聞賜ふをキコシメスト云ふ各差別ありや

（第八十三）御門の巫の齊き奉る神ハ櫛磐間門豐磐間門の二柱なるを神名式に御門巫祭神八座とあるハ如何ある譯ぞ

（第八十四）御門の神ハ天石門別神一柱と聞こゆるを此祝詞ハ櫛磐間門豐石間門とありて二柱の如く聞こゆ

（第八十五）櫛と云ひ豐と云ふハ神德を稱美せる語なるよし諸書に見へたれども其意義解しかたし今櫛豐兩語の意義を問ふ

（第八十六）石間門と稱し奉る神名の意義を問ふ

（第八十七）湯津と云ふハ五百箇に賂言なるよし考へも見えたるが然れハイホツと云ふべきをかいてすしてユツと云ひ湯津の字を用ゐらるたるハ如何

（第八十八）磐村と云ふ村乃字ハ正字なるか又ハ借字なるか

（第八十九）塞坐をフサガリマシと訓ふ又ヲヤリマスと訓むいづれか當れりや

（第九十）朝者御門開奉夕者御門閉奉とあるハ皇居の御門を神の開閉し玉ふ事なるこの人の爲に業を神の幽とりたたけ玉ふことを申すか

（第九十一）蹠夫留物とハ講義等に妖鬼を云ふと云へれたるが何故妖鬼をウトブルモノといふや

（第九十二）御門に出入る物ハ内より又ハ外よりと云ふべきを上より往くとかひ又下より往くと云ふハ何譯なることか

（第九十三）夜能守日乃守とハ晝夜を分擔して守り玉ふと申すことと又ハ晝夜を捨てず守れせ玉ふと申すことなるか

（第九十四）生島とハ神名なるか又ハ地名なるか

（第九十五）右生島ハ神名なれハ何神をさして申すか地名なれハ何地をさしていふか

（第九十六）祝詞の文中及ひ神名等に生何と云ふ語に足何と云ふ語を相對して用ひられたり其意義如何

（第九十七）島能八十島とハ只小さき島々をいふの廣く萬國を兼ていふ言なるう

（第九十八）谷蟆とハ如何なる虫を云ふり

（第九十九）狹渡極は狹ハ正字なるか又假字なるかサワタルキハミをハ谷蟆の運用する狀をさすことなるが然らハ如何なる運用は景狀をさすう

（第百〇〇）盪沫ハレホノアワと云ふ事なるが此をレホナソを訓むハ如何又留限とハ如何あることゝ

（第百〇一）狹國者廣久峻國者平久をハ神の御功德を以て狹く峻しき國を廣く平らけく造りなし玉ふを申すか又行通を廣くゝ道路などの開らけ行くことを斯く申すあるか

（第百〇二）壓事無久乃壓の字ハ正字なるう又ハ借字なるか

（第百〇三）辭別云々　新年祭乃祝詞中天照大御神に白すに限りコトワキアと申すハ如何なる譯ぞ

（第百〇四）大前をフトマヘと訓ム又ハオホマヘと訓む何れか是ありや

（第百〇五）見霧生四方國云々此ミハルカレと云へる言ハ四方の國を如何ゝ玉ふことを云ふか俗耳に聞取らるべき明解を乞ふ

（第百〇六）天の壁立極此をアメノカベタツキハミと訓み又ハアメノカキタツキハミと訓む何れか是あるや

（第百〇七）壁立とハ如何なる景狀をさして云ふう

（第百〇八）國能退立限云々此をクニノソキタツカギリと訓むハ如何なる譯ぞ

（第百〇九）天にハ凡て地を對して呼ぶ事を心得たるか神名

又ハ祝詞の文なとに天何々國何々と相對して用ひられたる所往々見へたり天地と云ふと天國と云ふとハ差別ありや

（第百十）青雲に靄く極みと云ひ白雲ハ隱居向伏限と云へり青白の色につけて差別の有る事あらべしと思ふ明解を乞ふ

（第百十一）青海原をアナミナハラと訓ふ又アナミハラと訓むハ何れか古訓なるや

（第百十二）掉柁不干とハ船舶の事に就て稱する言と聞ゆるか如何ある事を云へるあるか

（第百十三）船艦を考ふハフナノヘを訓ふ正訓にてフネノヘと訓まれたり何れか正しきや

（第百十四）艦とハ船の何處をさして云ふか又至留極とハ朝貢船の往通ふを云ふか又世界萬國海路の開らける限りを廣く取總へて云ふ言なるか

（第百十五）大海爾舟滿都々氣此を正訓にハ大海原爾云々とあり然るへき義ありて斯く改められしが又兩樣何れに從ふをよしとせるや

（第百十六）磐根木根此を考にハイハネコノ子と訓み正訓にハイハネキネと訓めり何れに從ふへきや

（第百十七）履佐久彌云々此を考に蹈割の義なりと云ひ後釋にハ凹凸ある道を蹈行を云ふと云へれたり此兩說何れにしたかふへきや

（第百十八）遠國とハ何れの國々を云ふや

（第百十九）八十綱打掛氏引寄云々ハ實ある其事有りし故事を引て云ふの只遠國をなつけて朝貢せしめ玉ふと

とを云ふ

（第百二十）荷前云々此をノサキと訓むハ如何なる譯けそ又問ふ荷前をハ何らなる物なるや

（第百二十一）神漏岐神漏美命云々ハ女男二柱ノ神にかゝる言ありと思ふに天照大御神一柱を稱へ申ぶるも此言を用ゆるハ如何なる譯そ

（第百廿二）宇事物頭根衝拔と云ふハ事物を即ち物と云ふ詞なりと云ひ又狀之意ゐて邪麻の音の自毛に通へるなりとも云ふ何れか是なるや

（第百廿三）ウジモノウナヂツキヌキとハ如何ある形容そそして云ふ詞なれやや

（第百廿四）御縣とハ地名なるか郡名なるか又ハ官田庄園の如たものを云ふか

（第百廿五）ミアガタに御縣の字を書ゝへれたるハ借字なるか又ハ正字なるゝ

（第百廿六）御縣座神ハ六所共に同神なるか又ハ社々にて其祭神を殊にするゝ

（第百廿七）長御膳能遠御膳と云ふハ御食の稱辭と聞ゆるが長と云ひ遠と云ふハ深き意義なれことか

（第百廿八）山口此をヤマクナと訓むとヤマノクナト訓むと何れゝ正しをや

（第百廿九）山口坐神等の祈年祭にあつゝり玉ふハ如何なる譯そ

（第百三十）遠山近山爾生立留云々此遠山近山ハ大和一國中にて其遠近をわかち云ふゝ又近國乃山々をもいかけて云ふか

（第百卅一）宮材を伐る時其本末を山神に祭るハ何故ぞ

（第百卅二）ヨモノタニとハ四方の國なるか又四面の國なるか

（第百卅三）水分神ハ水をくばり玉ふ神ある故名に負ひ玉ふよしなるがくばりと云ふことをクマリをいふハ如何ある譯ぞ

（第百卅四）朝御食夕御食云々世俗に朝夕三度の食事あると云ふを見れハ晝御食といふ事無くてハ叶ぬ事なりと思へる然るに只朝御食夕御食とのみ云ふハ朝夕のみを云ひて晝ハ其中にこもれりとするか

（第百卅五）又古昔一日の食事ハ朝夕二度ありしか如何

（第百卅六）加牟加比とハ如何あることぞ

赤丹穂爾聞食云々此ハ天皇ゟ御食をきこしめす景狀を稱へて申すよしなるか然らば如何なる景狀をさして申すか

（第百卅七）アカニハ赤土なりと云ひ又赤玉なりと云ひ又物の妍美なるを云ふとの說あり何れか正說なりや

（第百卅八）弱肩を弱ゟ身ゟ重き任することなりと云ひ又肩ハつがひ目にて折屈む所なる故ゟ弱と云ふと云へり此說何れか正しきや

（第百卅九）太多須支取掛氏云々神を祭ゟに何故タスキをかくるや

（第百四十）由麻波利清麻波利云々由と云ひ清と云ふハ差別あることの

以上祈年祭以下春日祭

（第百四十一）春日祭ハ何天皇の何年に始まりしや

（第百四十二）春日をカスガと訓む譯を問ふ

（第百四十三）天皇我大命爾坐世云々是れを考にハ大命爾坐衆と改めてオホミコトニマスと訓まれたり何れか正しきや

（第百四十四）春日社に祭る四柱の神の中健御賀豆智命伊波比主命天之子八根命ハ神代系圖にも出て判然たるお此賣神ハ万幡姫命なりと云ひ又天照大御神なりと云ひ又三柱姫大神なりと云ひ又兒屋命乃后神にて天細女命なりと云へり諸説何れに從ふへきや

（第百四十五）廣前々云ふことハ古くハ見えぬ詞ありと云ひ又前つ天皇を齊き奉る宮なりを以て廣前と云ふと乃説あり何れに從ふへきや

（第百四十六）鹿島香取枚岡に在す神等を春日に祭りませしハ神等の乞てし賜へるによれる由祝詞の文に見へたりこの神詫なりし年ハ何天皇の何年にて又其事を記載せし物ありや

（第百四十七）柱ハ太知と云ふ方至當なりと思ふに宮柱廣知と云ふハ如何なる譯ぞ

（第百四十八）天乃御陰日乃御陰止ある下にハ必らず隱坐氏と云ふ言ありハ文体を調ひたりと思ふに定奉氏とのみにてハ文章足らはぬ樣に覺ゆ此は時世乃遠近によりて然るか又他に説有る事ありや

（第百四十九）神寶ゝ鏡横刀弓梓等の武器を奉るハ如何なる譯ぞ

（第百五十）御馬爾備奉理云々此の爾の字ハ乎とあるなよろしからんと思ふか爾を乎とても聞あたるとの說なり何れも正しきや

（第百五十一）公事用ひ給ふ物を下より奉るを御調と云ふハ何故あるや又御調をミツギと訓む譯を問

（第百五十二）御調能荷前云々此乃荷前ハ稻のみを云ふか又種々の物乃をつはを云ふか

（第百五十三）神主爾云々此の神主ハ祭典に京より其社へ發向する人を悉く申すか又其中に一人別に神主なるを取總へて斯く申すか

（第百五十四）安幣帛乃足幣帛云々此安と足とハ如何ある意義あるか

（第百五十五）皇大御神とハすへて皇祖の神たちつゞきてハ天皇の御上を申す言と思ふが春日社の祭神を皇大御神と申すハ誤りにハならざるや又他の由なることか

（第百五十六）去前をイニシヘと訓みて過去乃事あるとし又ユクサキと訓みて將來のことゝせり何れに從ふへきや

（第百五十七）足御世乃茂御世此の足と云ひ茂と云ふハ如何なる意義あるか

（第百五十八）預而奉仕流此政太政を預を申よりして諸司百官に係れりと云ひ又關白ハ事なりと云ひ又御使の王等卿等を云ふといへり右の各說何れか定むへきや

（第百五十九）處々家々云々此處々を官省寮司衞府京國職廳

を兼ねて云ふとんひ又京中の事を云ふといへり何れに從ふへきや

（第百六十）又家々を王卿百官の家々なりと云ひ又其一構あるを云にて舍宅とハ異なりと云へり是又何れに從ふへきや

（第百六十一）王等云々此王ハ皇子と諸王を取總へて申すか皇子ハ諸王と申す別稱あ此ハ此ハ諸王のみを申すか又親王と諸王との差別を問ふ

（第百六十二）卿等云々此をマヘツギミタチト訓むハ如何なる譯ぞ

（第百六十三）マヘツギミタチハ大臣以上の人を云ふか又別に極まりたる爵位をさすか又朝廷の諸官人をすべ云ふか

（第百六十四）伊加志夜久波叡云々此のヤクハエを彌木榮乃義ありと云ひ孫枝の義なりと云ひ又八桑枝の義ありと云又イカシを五十槻の義ふをと云ふ何れか正說なりや

（第百六十五）山城大原野に春日神を遷し祀ら社しハ何故なるや又遷されしハ何れの御代ふるや

右春日祭

以下廣瀨大忌祭

（第百六十六）廣瀨祭を大忌祭と申すハ何故ふるや

（第百六十七）大忌祭ハ何社の御代より始まりしや

（第百六十八）廣瀨能河合云々廣瀨ハ今も郡名に呼ひ又神社在る地を今も川合村と云ふ然をハ此に河合と云ふハ村名を以て云ふか又河の流れ合ふ處な

れを以て廣瀬の川合と云しを後世村名とせしものか

（第百六十九）御膳持須流云々此の持たすると云ふ詞ハ言辭四種活用等ゐ照してハ少〻く穩かなれすを覺るが書寫の誤にハならさるの但し一種かゝる活語の格あるか如何

（第百七十）若宇迦能賣命を御膳の神とするハ何故そ

（第百七十一）此皇神御前云々此と云字祝詞乃文にしてハ他に例なきことゝ思いる他に訓ゐ樣あるゐやと

（第百七十二）稱辭竟奉久乎云々祝詞正訓上ノ八丁此奉久乎を風神祭詞の例によりて奉爾と改むべしとの說あり何れゐ正しきや

（第百七十三）五色物此ハ神寶の五種を申すの絶乃色を申か

（第百七十四）盾矛御馬云々神に盾矛を奉るハ何故なるや

（第百七十五）又問御馬ハ祭典の用に供する爲に奉るゐ又ハ神のめし給ふ料に奉るゐ

（第百七十六）和稻荒稻云々和とハ稻ハ如何なる物を云ふの荒とハ稻の如何ある物を云ふゐ

（第百七十七）毛乃和支物毛乃荒支物云々和支物とハ何を云ふか荒支物とハ何を云ふか

（第百七十八）上文の支乃字を後人の書加へたるまて非事ありと云ひ又一種の詞にして非事にあらすを云ふ說ゐを何れか正當あるや

（第百七十九）皇神前爾白賜倍止宣云々此を俗語まてハ如何に云ふか意義の解せらるへき樣解說ゐれ

（第百八十）御刀代とハ何の事ぞ

（第百八十一）親王等王臣等天下公民能取作奥都御歳云々とあるてハ親王諸王等も公民と同しく耕作に從事し賜ひし樣に聞ゆるハ文字乃脱落したるにてハ無きや如何

（第百八十二）引居氏を云ひ次に打積買氏と云ふを言の重れるにハ非るか又兩語夫々意義を含めることゝ

（第百八十三）秋祭爾奉年云々大忌祭ハ四月七月ゐ行えせらるゝよしなるが此に秋祭とあるハ七月のを申とゝ七月ハ未た稲穀の生熟せさる時なれハ秋祭ハ別途設けらるゝならんとの説あれと其確定を知らす請ふ確説を示めせ

（第百八十四）大和國を倭國と書たしハ何れの御代のことなるや

（第百八十五）大忌祭に山口神を祭るハ何故なるや

（第百八十六）六御縣乃山口云々此の乃字ハ及乃誤ならんと云ふ説あり何れに定むへきや

（第百八十七）佐久奈太理ハ逆垂の延言なりと云ひ眞下垂の義ありと云ふ何れか正しけや

（第百八十八）水の事を祈るにハ水分神を祭るべけに山口神を祭るハ何故なるや

（第百八十九）甘水云々此をアマキミツと訓み又ウマキミツと訓むハ何れか是なるや

（第百九十）甘の字ハ味のことを云ふか他に意義あるか

（第百九十一）荒水とハ如何なる水を云ふぞ

（第百九十二）汝命をナガミコトと訓み又ミマシコトと訓

む何れゝ是なるや

（第百九十三）汝命云々此汝の字ハ卑めたる稱なりと思ふに神の御上を稱するに用ひたるハ如何

（第百九十四）一説に古昔ハ天皇を汝命と申せ一例とあるよし云ハ拙たり其例ハ何等の書に出たるや

（第百九十五）刀彌男女云々此の刀彌ハ舍人にて公の守する人をすべて云ふをいひ又里長防令を云ふとゝひ又處主の義なりと云男女ハ其處主處母の事なりと云ひ又男女ハ官吏ならぬ百姓をさしていふとの説あり何拙に從ふへきや

（第百九十六）山口十四座乃中六座ハ祝詞の文にて承知せり餘の八座ハ御名を何々と申すか

右廣瀬大忌祭　以下龍田風神祭

（第百九十七）龍田社の祭神を問ふ

（第百九十八）龍田社ハ何天皇の御代より祭を始められしや

（第百九十九）龍田と云ふハ郡名なるか村名なるか又ハ郷名なるゝ又ハ其地の字なるか

（第二百〇〇）志賀島爾云々此ハ其御代の皇居なりし處と聞ゆるが何天皇乃皇居なるや又大和國のうちにて何地方になるや

（第二百〇一）島ハ四面に海水を受けたる地或ハ山を云ふとありと思ふ古昔天皇の皇居せし大和國中の地名に志賀島又ハ輕島又ハ秋津島などゝ島の字を帶ふるものあるハ如何

（第二百〇二）大八島國とハ何れの國々を申せか

（第二百〇三）五穀物云々五穀の種目ハ漢土にても一様なれども楚辭の注にハ稻稷麥豆麻と見え孟子注ハ黍稷菽麥稻とあり素問にハ黍麻粟麥豆を見えたり皇國乃五穀ハ何々を云ふか

（第二百〇四）公民乃作物乎云々此作物乎を正訓ハハツクルモノヲと訓まれたり語格何をか正しきや

（第二百〇五）草乃片葉云々此のカキバを大殿祭にハ可岐葉を書き大祓詞ハ垣葉と書けり片可岐垣の字に就て異義あることか

（第二百〇六）此ハ祝詞なる草乃片葉と大祓詞なる草乃垣葉とハ文義少しく異なる所あるべしとの説あり何等の異趣あるか

（第二百〇七）一年二年爾不在歳眞尼久云々此の文中なる不在を風神の御守うすくして五穀植物の不熟あるを云ふと云ひ又一二年ならず數年間打つゞきて荒凶なりし事を云ふとの説あり何れか正しかや

（第二百〇八）歳眞尼久云々マヂクハ間無の意なりと云ひ又度しげく重なる言にて間無乃意にハならずと云へり兩説何れに從ふへきや

（第二百〇九）百能物知人等云々此を多く物を知りたる人を云ふといひ又一説にハ物知人の數を云ふといへり何れか是なるや

（第二百十）卜事ハ鹿の肩骨を灼きてうらなふことなりと云ひ又龜を灼きてうらなふことなりと云へを

然らハ磯城瑞垣朝にハ既に龜卜をわざ開らけたりしの如何

（第二百十一）出牟神乃御心者云々ハならハるゝ神の御心を云ふ言にイト事爾出牟とつゞけて讀むハとろしとの説あり此ハ下に出留神の御心母無と云ふ言に對へて言名説ならんを思るゝが出る神の御心とハ神慮をさして申すか又ハ神乃御名のみを伺ひ奉ることを申すか

（第二百十二）又問ゝ講義の説によるハ百の物知等が神名をあらうじめ定め置て其の應へりや應はぢやを太占にト合する由なれとも次のト止母出留神の御心母無云々を見れハ荒ひ玉ふハ何神の御心あるぞと伺ふよしに聞こゆるが前後の文る通して確定すへき明説あるか

（第二百十三）忘事無久遺事無久云々此ハ神々を忘れたまへぬぞ申すか又其祭祀の欠典なきを申すか

（第二百十四）遺事をノコルコトと訓み又ナツルコトと訓むハ何れも正しきや

（第二百十五）思志行波須乎云々此をオモホレメスト訓みて波字ハ衍文あらんと云へ此又オモホレオコナハスと訓むへしとも云へれたり何れか正しきや

（第二百十六）誰神曾をタレツノカミゾト訓み又イヅレノカミゾと訓むハ何れか正しきや

（第二百十七）作作物云々斯二字重ねたるハ單に作物とあるとハ其義別なりとの説あり如何なる別なるや

（第二百十八）宇氣比ハ祈誓の意なるか又ハ誓約の意なるか

語乃意明瞭ならす請ふ解義をしめせ

（第二百十九）相都々と云ふを不相賜と云ふとハ過去未來の

差別ありとの説ありを其差別如何

（第二百二十）天の御柱命國乃御柱命此と龍田に祭る風神の

亦乃御名なるか神代紀に以天柱舉於天上也と

見ゆ又化豎天柱とあるハ此の風神の御事なり

とも云ひ又其の天柱ハ別にて風神の御事にあ

らすとも云へり此説何れか是なるや

（第二百廿一）朝日乃日向處夕日乃日隱處云々ハ社地の實景

又眺望の絶勝を稱へ云ふ由なるか朝日云々ハ

實に美景なれとも夕日云々ハ美景を稱する詞

とも思はれす只朝夕と對し云へるのみか又他

に說あれとも

（第二百廿二）立野乃小野云々立野ハ今も村名に稱して判然

たり小野と云ふハ地名なるか又ハ其地形を美

稱せるか

（第二百廿三）辭教云々此の辭ハ言ひ教ゆるの意あるか宮殿

を經營する事を教へ玉ふなるか

（第二百廿四）比古神比賣神二柱を祀れる社たりとを普通に

ハ別々に獻物せし例なれは龍田の社に限り比

古神比賣神へ別々に獻物することを祝詞の文

に記るさ紀たるハ趣意あることか

（第二百廿五）金乃麻笥金揣金拵と何れを金云々とある此の

器ハ何れを金もて造られしか又金箱を置たる

のみなるを云ふか

（第二百廿六）麻笥ハ如何なる形なるか

（第二百廿七）揣とハ如何なる形の物なるゝ

（第二百廿八）拵の形ハ如何なるゝ圖に畫いてこれを示せ

（第二百廿九）此の次なる明妙照妙和妙荒妙五色能物の十二字を攪入あらんと乃說あり又御服備の目を記せるなれを攪入なるすせも云へり何れか正說あるや

（第二百三十）皇神乃成幸賜者云々此の賜者を四月月祭にハタヽハヾと訓み七月の祭にハタヽヘハと訓むべしとの說あり何故斯く異へて訓むか

（第二百卅一）初穗者云々秋祭爾奉牟云々此ハ七月の祭乃事を申せゝ新嘗祭の事を申すゝ

（第二百卅二）此祭の御使ハ四位五位の人を遣はさる例なれハ王卿等百官能人等云々の卿字ハ書違ひなるへしとの說あり何故ゑ斯く云へるゝや

（第二百卅三）此の祭と廣瀨祭とハ同日なゝが京よりの御使ハ各社別々に遣はさるゝありと云ひ又廣瀨の祭り畢りて後龍田に參向せらゝるなるへしと云へり兩說正否如何

（第二百卅四）六縣の人々を右と同樣なるか此ハ別々に參集へなるゝ

右龍田風神祭　以下平野祭

（第二百卅五）平野祭の始まりしハ何天皇乃御代なるや

（第二百卅六）平野社の祭神を問ふ

（第二百卅七）今木與里云々此の今木ハ地名なるゝ又神名なゝか地名ならハ何地を申すか神名ならハ何神

を申すか

（第二百卅八）今木神ハ石上大神ありとの説あり此説あたれりや如何

（第二百卅九）仕奉來流とハ甲乃地より乙乃地へ移して祭る事を申すか甲の地に祭れる神の分靈を乙の地へ遷して祭る事を申すか

（第二百四十）皇大御神云々普通の神ゐ斯く申す例ありや但し文法の頽紊たるか

（第二百四十一）神主爾云々此の神主ハ卜部の事を申すか又ハ御使に遣ちす人の中にて此名稱を附すへき人を別途に任するなるか

（第二百四十二）神財波御弓御太刀御鏡鈴衣笠御馬乎云々弓刀鏡鈴衣笠を神だりらをするハ聞こゆたるとも馬を神だりらをとすりハ如何と覺ゆと云ふ人あり明説を乞ふ

（第二百四十三）衣笠とは如何あるものぞ

（第二百四十四）置高成氏云々此をオキタフハシテと訓ゐ又オキタカナレテと訓むハ何れとり當れりや

（第二百四十五）朝廷爾伊夜高爾云々此上の爾ハ乎の誤にてスメラガミカドヲイヤタカニならんとの説ありなれハ文意ゐ自他の同異あり何れか正しきや

右平野祭　以下久度古開

（第二百四十六）久度古開二所は何神を祭れや

（第二百四十七）定奉云々といふと稱辭竟奉云々といふとハ大に差別あるやとなりと云へり其差別ハ如何

（第二百四十八）神今食とハ如何なる祭なるや

右久度古開　以下六月月次祭

（第二百四十九）月次ハ年中毎月あるへき祭なりと思ふに六月十二月乃兩月に限り月次祭せらるゝハ如何

（第二百四十）月次祭に預りたまふ神ハ京畿諸國を合せて何座なるや

（第二百五十一）月次祭の始まりしハ何天皇ゟ何年なるや

（第二百五十二）此の祭の祝詞ハ大概祈年祭の祝詞と同し事なるが祈年祭乃文にハ明妙照妙云々の文見えさるゟ此文ゟは其言そのせられ又御年神云々の文を省かれたるハ如何なる譯そ

（第二百五十三）ヤカツカミノヤツリとハ如何なる祭そ

（第二百五十四）漢土の七祀とハ何々なるや

右六月月次祭　以下大殿祭

（第二百五十五）大殿祭ハ何月何日に行はるゝ祭なるや

（第二百五十六）祭乃字をホガヒと訓むハ何故あるや

（第二百五十七）祝詞考に引かれたる四時祭式此の祭の條に忌部云々至浴殿懸玉四角玉懸厠殿四角次懸御厨子所四角云々此文中なる厠ハカハヤにハ非るへしその説あり然らハ何處を云ふか

（第二百五十八）大殿祭乃起源を問ふ

（第二百五十九）此の詞の初になる神魯企神魯美ハ何神をさして申すか

（第二百六十）天津高御座とハ天神の御座を申すか御即位ゟ付て別に設けたる御座を申すか

（第二百六十一）坐氐云々此の祝詞の初なる坐氐ハマセテと訓ゟ次なる坐氐ハマシテと訓むハ現在未來の差別

あることあるが何故斯く差別するか

（第二百六十二）天津爾乃鏡劍云々天照大神の天孫に賜ひし神寶ハ三種あるに此に鏡劍のみを云ひて神爾を漏らされたるハ如何

（第二百六十三）言壽云々ホギと云ふハ如何なることぞ

（第二百六十四）宜志久云々此をノリタマヒシクト訓ミ又ノリタマハシクと訓むハ語格何れか正しきや

（第二百六十五）宇豆御子とハ皇祖神の御詞なるが受子を申すことの又よ子と申すことか貴珍殿の字に通て說明せらるへく確定あれ

（第二百六十六）此の天津高御座爾坐氐云々此のとハ天上にて用ひ玉ひし高御坐を下津國へ持下り玉へと御詔ありしことか又ハ此乃如き高御座にと申すことか又此樣ゐと申すことか如何

（第二百六十七）天津日嗣云々日嗣ハ日の神の御末を嗣玉ふを申すといひ又日神の御心を御心として業を繼玉ふを申すと云ひ又日神の御業を嗣々に知食比を申すなりと云ふ諧說何れに從ふべきや

（第二百六十八）萬千秋乃長秋爾云々此ハ大八洲豐葦原へかゝる稱辭ゐ又ハ瑞穗之國へかゝる稱辭あるゝ

（第二百六十九）大八洲國とハ何れの國々を云ふか

（第二百七十）豐葦原云々ハ高天原より號けたる號ゐ下つ國にて號けたる號か

（第二百七十一）瑞穗とハ葦の穗を美稱せるか又ハ稻穗をさして美稱せるゐ

（第二百七十二）所知食云々此處は訓注に古語云志呂志女須と
ゐ社ハレロレメスと訓むべきにレロレメセと
訓むハ如何なる譯ぞ
（第二百七十三）以天津御量氏云々古語拾遺天御量乃本注に大
小斤雜器之名也とあるハ一種器械の名と聞こ
ゆれどもそれにては聞えがたし御量ハ假字に
て御議の義なるか如何
（第二百七十四）言問之ハ我より彼に向ひて物を問ふ事なれか
又ハ只物を云ふことなるか
（第二百七十五）磐根木根乃立云々此ハ木の根を云ふり木の杠
を云ふか磐にも根と云ふを見れハ根の事にハ
あらしと思はる此の根字の意義を問ふ
（第二百七十六）神代にハ岩木も物言ひしとの說を聞けり此ハ
何等の書に見えたることぞ古史神典を就て
最も正しき傳說を志めせ
（第二百七十七）草能可岐葉云々此カキハは片葉の事なりと
云ひ又闕葉なりと云へり此ハ多くある葉の
うちの一葉まぢと云ふ意の闕取りたるあと
乃一葉までも云ふ意ゥ如何
（第二百七十八）言止氏云々ハ石草木の自ゐ言語を止むるな
るか又ハ經津主武御雷二神の稜威を以て止
まーめたゥを云ふか
（第二百七十九）食國天下登云々此の言ゐ體用の差別ゐるとも
云へり其差別如何
（第二百八十）天下登此乃登の字に如何なる意義を含むか
（第二百八十一）食國天下云々と天津日嗣云々ハ政事と皇統

とを分けて申すなりとの說ありを然らば何れを政事とし何れを皇統とするか

（第二百八十二）天津日嗣所知食須皇御孫之命云々此ハ瓊々杵命を申すか今上を申すか

（第二百八十三）今とハ御殿を造る時をさすか其御代をさすか又ハ大殿祭仕へ奉る時をさすか

（第二百八十四）峽とハ山の如何なる處を云ふか

（第二百八十五）立留木乎云々山口神祭詞にハ生立留大木小木云々とあり立留木と云ひ生立留木と云ふハ差別あることか

（第二百八十六）齋部能齋斧云々此の齋斧とハ齋部の用ゆる斧なれ故ゆ斯く申すか忌み愼む意を以て斯く申すの如何

（第二百八十七）齋部の宮材を伐り始むると云ふ事ハ何の書に出だる事ぞ

（第二百八十八）本末乎波山神爾祭氏云々此祭の字を一說ゆムクと訓まれたり何れを正しきや

（第二百八十九）中間乎持出來氏云々此中間をナカラと訓みヌナカノマと訓むハ何れか正しきや

（第二百九十）伐々たる材の本末を山神に祭るハ今の世にもすることあるか如何

（第二百九十一）齋鉏乎以齋柱乎立氏云云此鉏ハ穴を掘る爲先ず用ゆか又此穴ハ忌部が掘るか何人が掘るか

（第二百九十二）天之御翳日之御翳云々此ハ前の詞にある如く只隱れますを云ふのか又ハ草を以て屋を覆

ふことを云へるか

（第二百九十三）瑞之御殿云々此の瑞の字ハ御殿の美麗なるをいふか又ハ吉瑞の瑞なるか

（第二百九十四）アラカハ在所の意なりとハ何人の説なるや

（第二百九十五）汝屋船命云々神名の上に汝の字を加へたるハ何故なるそ

（第二百九十六）天津奇護言云々ハ天津祝、詞太祝、詞をいへる如く一種天神の物ー玉へる物ありて申たり只神をいへひ鎭祭る事ゝ就て申すか

（第二百九十七）言壽鎭白久云々ハ家屋の災害あらぬ事を祝ふ言を申すか奇護言と種々いひ榮すを申すか

（第二百九十八）此乃敷坐大宮地云々此の宮地ハ當今天皇の宮地を申すか又ハ天孫のむーめて宮居し玉ひし地を申すか

（第二百九十九）底津磐根乃極美云々大宮地神ハ坐摩神なりと古語拾遺ゝ見えたるに此に屋船神ゐも大宮地の事を祈願するハ如何なる譯そ

（第三百〇〇）下津綱根云々此の綱ハ家室を結固めたる綱根と聞ゆるが下津云々と云へるハ家室の何處をさすか

（第三百〇一）綱根を或書に葛根とも書たり何れゝ正字あるや

（第三百〇二）番繩云々此も結ひ固めたゝ繩とハ別なるべしと思へるゝが如何ある形に結ひたる繩なるか

（第三百〇三）波府蟲能禍云々此ハ如何なる虫類をさすか

（第三百〇四）虫類をハフムレと云ふハ譯なることか

（第三百〇五）高天原波云々此處の高天原ハ他ゐ云へる高天原とハ異なりと云ふ說あり何故同名ゐを意義を殊異にすれゝ

（第三百〇六）天乃血垂云々此の血垂を姑獲鳥の兒の衣ゐ血を滴く類を云ふといひ又ナダリハトダルゐを人家の屋根乃煙出しなりと云ふ右兩說何れに從ふべきや

（第三百〇七）堀堅多留柱云々此を柱を直土に掘り立ることをいふかたゐたゐと云ふ言ハ柱のみゐらす次乃桁梁へもかゝる言ゐをと云ふハ當れをや

（第三百〇八）柱を何故ハレフと云ふか

（第三百〇九）桁梁云々桁をケタと訓ゐ梁をウツバリと訓むハ何故あるや

（第三百十）戸扉云々戸を何故トと訓むやマドに扉字を用ひたると窓字を用ひたるとハ差別ゐれゝとの又扉窓をマドと訓む譯を問ふ

（第三百十一）錯云々キカヒハ行合の約語なりと云ひ又木交の義ありと云ふハ何れか當れりや

（第三百十二）葛目乃緩比云々此目ハキメ乃横通にて綱根と同しといひ又目ハ結目のことなりと云ふ何れか當れりや

（第三百十三）取葺計魯草云々カヤとハ一種屋根を葺く草ありて申すや又ハ何草にも此屋根をふゝべき草を取總へてカヤといふり如何

（第三百十四）　喋、岐云々ソハギとハ草乃如何に成りたるを云ふか

（第三百十五）　御床都比云々都比ハ繼合の義なりを云ひ又都ハ之と同しく比ハ邊にて御床之邊なりと云へり兩説何れか正しきや

（第三百十六）　佐夜岐云々此のサヤギハ俗に云ふサワギと同事なるか又別事なるか

（第三百十七）　夜女云々此を夜の御床に仕奉る童女の事ありといひ又夜目にて夜眠る間を云ふと云へり兩説何れか正たるや

（第三百十八）　伊須々岐云々此を心を心ならしすゝろく事なりと云ひ又物におそれを驚ろく事なりと云へり兩説何れに從ふべきや

（第三百十九）　伊豆都志伎云々此を齋飾の事あるを云ひ又伊ハ發語にてツハシキなりと云ひて万葉集の都々美云々の語を據るとの説あり何れか正當なるや

（第三百二十）　奉護留云々此ハ只神の守り玉ふを申すか又ハ神より天皇を護り奉るを申すか

（第三百二十一）　屋船久々能遲命云々此神ハ何神の御子なるや又クヽノチと申す御名の意義を問ふ

（第三百二十二）　屋船豐受姫命云々此神の親神を何と申したか

（第三百二十三）　殿祭にハ木草の神を祭るべきに木神久々能遲命ハ祭り玉へども草神草野姫命を祭らすして豐受姫命を祭るハ何故なるや

（第三百二十四）　豐受姫命と宇賀能御魂神とハ別神ありを云

ひ又同神なりと云ふハ何をか當れりや

（第三百二十五）辟木束稻云々此を古へ產屋の戸邊に置きし

ハ如何なる譯そ

（第三百二十六）又米を屋中に散らすことハ不淨を拂ふ爲の

又ハ然るべき故事ありての事なるか

（第三百二十七）齋玉作等云々此ハ官名なるか又ハ只齋清き

もの玉を作る人と云ふことなれか又玉作

ハ齋部の率る所なればゆへあ斯く申すか

（第三百二十八）瑞八尺瓊能御吹支乃五百都御統之玉爾云々

八尺の八ハ數の八なるか又ハ彌の意なるか

（第三百二十九）八尺ハ八坂にて玉の出し地名なをと云ふ說

あり據なることか

（第三百三十）御吹支乃玉ハ吹きて作りし玉なりと云ひ又

ホギ玉あて壽玉の事ありと云何か正なきや

（第三百三十一）明和幣云々ニギタヘをニギテと訓ハ何故

なるや又コギタヘハやもらかるれぬと云

ふことゝ又ハよく調ひたゝきぬと云ふこと

か如何

（第三百三十二）齋部宿禰云々此を其處寐の意なりと云ひ又

少兄の約言なをと云ふハ何れか正說なやや

（第三百三十三）言壽鎭奉事能云々此に言壽を云ひ鎭奉と云

ふとハ異義あることやか

（第三百三十四）神直日命大直日命云々此の神ハ如何なる時

出現し玉ひしや

（第三百三十五）直日神ハ如何なる神德あるや

（第三百三十六）聞直見直云々此ハ祭事の漏落ん事を直し玉

へと申すことゝの又ハ幣物の備てらざるまゝを見聞直ー玉へと申すことゝの

（第三百三十七）詞別白久云々此より以下ハ大宮賣神へ申す詞なるが同し大殿祭なるに何ゆへ斯く境界を立てゝ祝詞を申すゝ

（第三百三十八）大宮賣神ハ何神の御子ゐて如何なる神德あるゝ

（第三百三十九）同殿能裡云々此處ある殿の一字をオホトノと訓むハ御殿をミアラカと訓むと意義に異なることゝ何なるか

（第三百四十〇）塞坐云々ハ遮きりとゝむるゐとを申すか又みち塞がりとゝむることゝを申すか明了なる解義を乞ふ

（第三百四十一）参入罷出人能云云此の罷出を考にハマカヅルと訓み正訓ゐハマカリイヅルと訓まれたれハ何れか正しきや

（第三百四十二）罷出人能此の能の字ハ乎となるへき所ありと思ふが能字にても其義ゐこゆるか

（第三百四十三）マイリと云ひマカヅルと云ふハ貴所へ向ひ又ハ貴所より退出すゝことなりと云ひ又貴所ならぬをを云ふとの說なり兩說如何

（第三百四十四）選比所知云々此を考にハエラビレラレと訓ゐ正訓にハエラビレロレメと訓めり何方に訓みても同義なるゝの又差別あるか

（第三百四十五）神等能伊須呂許比阿禮比坐云々此ハ神等の如何になしたまふ狀を申すか語の意義を明

解せよ

（第三百四十六）比禮懸伴緒云々比禮とハ如何なる物にて何乃爲ゆ懸るか又比禮ハ男のかくるものか女のうのうく多そのうの

（第三百四十七）襁懸伴緒云々タスキをかくるハ何の爲そ此も又男女によりてかくるに差別あるう

（第三百四十八）伴緒とハ官名なるう又ハ部屬を總稱するの名ふるの大祓詞に伴男と書きたれば男のことなりと思ふ多くが此の伴緒ハ男女ともあ申すことなるか

（第三百四十九）手蹟足蹟云々蹟ハツマヅクと訓む字なれハ足蹟ハ聞こえたるが手蹟と云ふハ如何ゝ覺ゆ多と云ふ人ありマガヒハ俗に間違ひと云ふことにてツマヅクの義に非とするか例を推して其明解を示めせ

（第三百五十）百官人等云々初位以上六位以下の人を官人と云ハ令乃制定なるが此祭にハ無位の人をあづかれを其人々ハ此乃官人云々の中へハ入らざるか又ハ無位の人をを取總べて斯く申すか

（第三百五十一）已乖々云々乖ハツムクと云義を含める字あを然るゆ只ムキ〳〵と訓むハ如何なる故そ

（第三百五十二）邪意穢心云々邪意と云ひ穢心と云ふハ差別あることか

（第三百五十三）官進云々此ハ百官人の大宮仕に進み勵むを

とありと云ひ又宮ハイヤにて禰進の義あり
と云へり何れに從ふべきや

（第三百五十四）宮勤此を考にハミヤイソレと訓み正訓ハミヤツトメと訓めり何れか正しきや

（第三百五十五）進と云ひ勤と云ふ言の解義を示めせ

（第三百五十六）咎過云々咎ハ此文中あて何をさすか過ハ此文中にて何をさすか

（第三百五十七）大宮實命云々此神を殊更に祭るハ御殿に就て深き由緣あることか又ハ大宮の内に坐す所の君と參入て宮仕する臣との間に係れる所謂を以て斯く祭祀るか

右大殿祭　以下　御門祭

（第三百五十八）御門祭ハ別途行なるゝ祭なりといひ又大殿祭につけて執行さるゝといふハ何れか是あるや

（第三百五十九）此祝詞ハ式に別途に出されたれども實ハ前の大宮實命云々とあるを同じ例にて大殿祭の末文あるとといへる説あり其説當れりや

（第三百六十）凡ての祝詞を見るに冒頭より神名を掲げたるものなし然々に此ハ祝詞の最初に二神乃御名を書出したるハ別途意義あるゝとか

（第三百六十一）四方内外御門云々此ハ禁門の事を申すの京城の諸門を申すか

（第三百六十二）天能麻賀都比登云神云々禍津日神ハ何神乃御子なるや又如何なる時現出ありしや

（第三百六十三）禍津日神に天能といふ言を冠らせたるハ他の例なるに此に斯くあるハ然るべき意義あることならんと思ふが如何ある意義あることなやや

（第三百六十四）言武惡事云々と神の直ち人に言ひ玉ふと云ふ意か又ハ人をして惡事を言ましめたといふ事ゝ

（第三百六十五）相麻自許利云々此ハ蠱物厭と同一意か又ハ率と書た遭害と書汐又変雜など書けると同し意あるか語の意を明解せよ

（第三百六十六）相口會事無久云々此ハ惡言を誹ふことなりと云ひ又惡意に與せるあとなりといふハ何れか當れりや

（第三百六十七）自上往波云々自下往敍云々此を考にハウヘユユカバ又レタユユカバと訓み正訓にハウヘユユカバ又レタユユカバと訓まれたりユユしいふも同義なれど難あるとれへとも兩訓の内何れゝよらハ誦讀乃調らへよろしきやゝ

（第三百六十八）待防掃却云々此を考にハマナフセギハキレツケ々訓み正訓にハマナフセギハラヒヤリと訓まれたり何れか正雅なるやゝ

（第三百六十九）言排坐氏云々此を考にイヒヒラキマレフと訓み正訓にイヒソダマレフと訓まれたり何れのよろしたやゝ

（第三百七十〇）待防と云ひ掃却と云ひ言排と云ふ三語ハ此

の文中にて各さは盧あるべしとの說あり然らば右三語のさす盧ハ此乃文中の何々あるや區別して答へよ

（第三百七十一）參入罷出人名乎問所知志云々此ハ上の兩別に選比所知志とあるとハ如何なる差別あるや

（第三百七十二）豐磐屬命櫛磐豐命云々最初にハ櫛豐と次第し此盧にハ豐櫛と相反して次第せるハ事實或ハ文法に付て然るべき說ありやとい

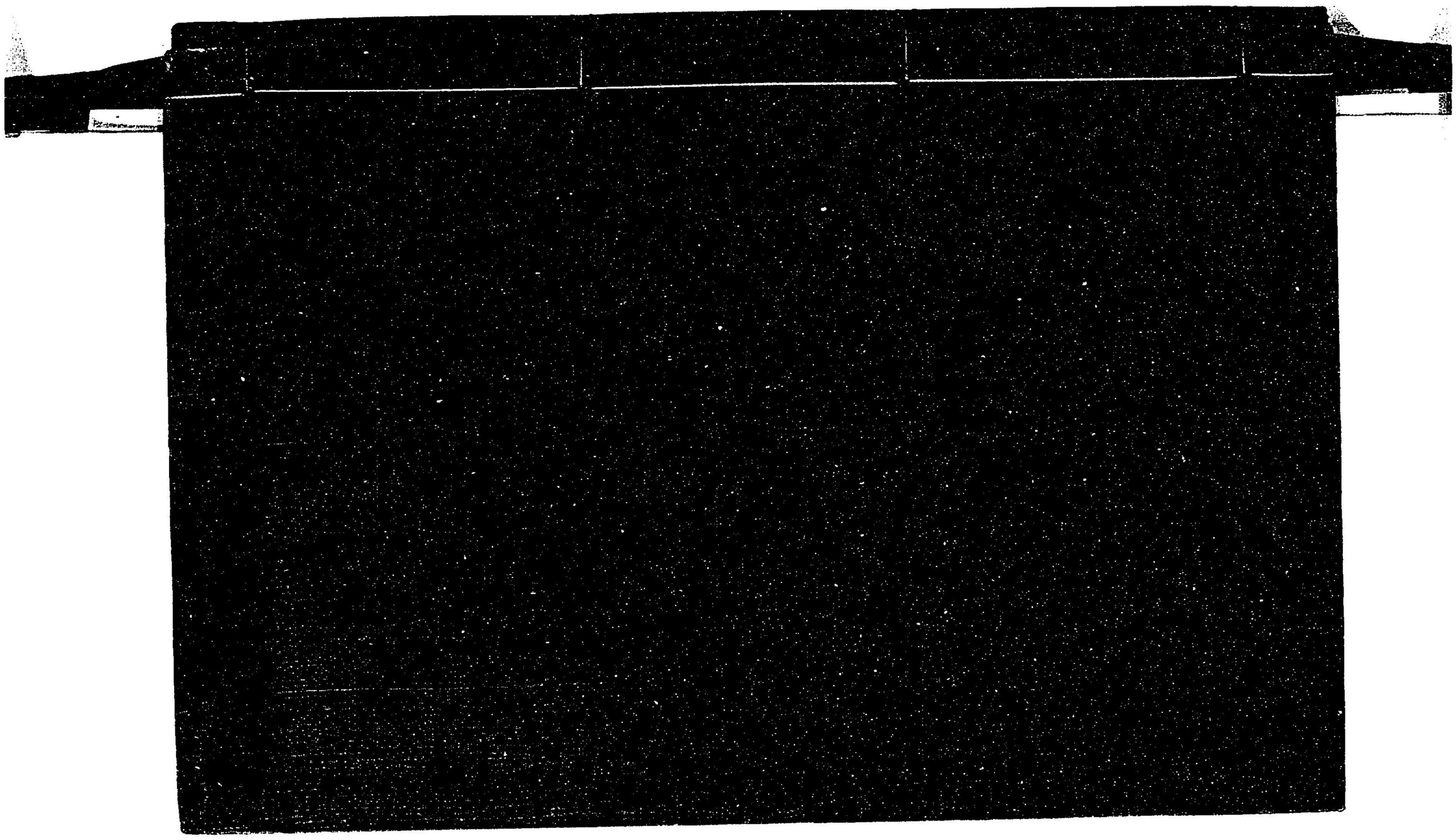
右御門祭　六月晦大祓詞以下ハ下卷ニ載ス

皇典研究試驗問題集上卷終

明治十七年三月十一日出版御届
全　年五月　出版
定價金壹拾錢
編輯人　兵庫縣平民　安倍喜平
淡路國津名郡洲本幸町七拾七番地
製本專賣所　出版人　大阪府平民　梶田喜藏
大阪東區南本町四丁目拾六番地
發賣所　吉岡平助
大阪心齋橋備後町
北村孝次郎
仝心齋橋本町南入

發賣所

柳原喜兵衛　大阪心齋橋筋北久太郎町
前川善兵衛　仝心齋橋筋南久宝寺町
鹿田静七　仝心齋橋筋安土町
福浦文助　淡路國洲本
船井政太郎　神戸元浦通五丁目
山野長平　播州姫路
三木半兵衛　備後國尾道
淡路新聞社　淡路國洲本
仝
仝
仝
仝
仝
仝

正　誤

四オ〔第四十〕取作命ハ取作牟の誤
五ウ〔第五十七〕祈年ハ祈年の誤
七ウ〔第七十九〕見ゑしは見えしの誤
九オ〔第九十二〕あ譯は譯あの誤
十ウ〔第百十〇〕堅居向伏は堅居向伏の誤
十二オ〔第百二十八〕正しとやハ正しきやノ誤
十六ウ〔第百七十二〕稱辭竟奉久乎ハ辞竟奉久の誤
又此奉久乎ハ此奉久の誤
廿四オ〔第二百四十四〕訓ひハ何れかハ何れかノ誤
廿五ウ〔第二百六十二〕天津爾乃ハ天津璽乃の誤
又神爾とハ神璽とノ誤
二十六オ〔第二百六十七〕知食すとハ知食すとノ誤
二十八ウ〔第二百九十三〕吉瑞ハ吉瑞の誤
三十五ウ〔第三百六十五〕相麻自許利ハ相麻自許利の誤
同ウ〔第三百六十六〕相口會ハ相口會ノ誤
又諸ふハ諸ふの誤